

(一) 挨拶

只今から齊藤多祈の納骨式を執り行います。
私は司式をいたします武藤陽一です。

多祈様のご長女黎子様は故山本泰次郎先生のご夫人であります。山本先生は私の信仰の恩師でありまして、その関係で私は早くから齊藤家のことを存じあげ、何かとご恩顧をいただいでまいりました。

一九八一年、黎子様がお母様と同居されるようになってからは、お訪ねする折々に多祈様にもお目にかかり、『恩師言』や『齊藤宗次郎と父母』のご恵与をはじめ数々のご厚情に与かりました。

ちようど一年前の昨年十月一日、多祈様が召される十日前でありましたが、友人の知らせで妻とともに浴風会病院にお見舞いに行きました時、それまでずっとお休みであったという多祈様が、私どもの呼びかけに目をあけてお応え下さったことを、いま有難く、うれしく思い出しております。

このような次第で、本日は、甚だ僭越ではありますが、ご指名により司式をいたします。お手許の式次第に従って式を進めますので、ご協力をお願い申し上げます。

(二) 祈禱

天にいます父なる神様、きょう私どもは齊藤多祈の納骨をなすべくここに集いました。集う者はすべて彼女に愛され彼女を愛する者たちで、彼女との別離の悲しみは尽きません。そして私どもは、「汝土よりとられたれば、土に返れ」という天の声を聞きまして、肅然としております。しかし私どもは、あなたの破格の恵みにより、主イエス・キリストの十字架の贖罪の福音を信じて、この土の器の一切の汚れを潔められ、罪を赦されて、聖きあなたのみ前に立ち得るものとせられることを、心から感謝申し上げます。

父なる神様、齊藤多祈は昨年十月十日、あなたの深いみ旨により、地上の生涯を終えて天に召されました。私どもは、彼女が、その生涯恵まれた忠信なるキリスト信仰を愛でられて、その罪を赦され、すべての苦しみ、悲しみから解放放たれて、「もはや死もなく、神自ら人と共にいます」あなたのみ国に入れられてあることを信じます。そして夫茂夫をはじめすべての愛する者とともに深い交わりを楽しんでいるであろうこと、また地上に遣された愛する者のために執成しの祈りを続けているであろうことを信じて深く慰められ、あなたの愛を心から感謝申し上げます。

どうぞ残されてきょうここに集いました者すべてが、その同じ恵みに与りうるものとしていただけますよう、お導き、お守り下さい。きょうの集いがあなたに祝されて、互いに慰めと励ましとを頒ち合い、あなたの栄光をあげます折として下さいますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

(三) 式 辞

ちょうどい致しましたきょうの集まりのご案内に、「宗次郎以来、花巻、成宗と恩寵の下に送ってまいりました斉藤家も、ここでひとつの大きな区切りとなりますので」とございました。このお言葉を讀んで私の抱きましたはなはだ個人的な感懐の一端を申し述べて、式辭に代えさせていただこうと存じます。

私は斉藤家を直接に存じあげている者ではございませんが、宗次郎先生や山本先生のお書きになったもの、あるいは折にふれて語られた山本先生のお話から想像しまして、斉藤家こそは典型的、模範的なクリスチャン・ホームであると、いつも思っております。それは、「見よ、兄弟が和合して共におるのはいかに麗しく楽しいことであろう。主がかしこに祝福を命じ、とこしえに命を与えられたからである」と詠んだ「詩百三篇」の詩人が描いたイメージそのものであります。

これは決して私だけの思いではなく、斉藤家に接したすべての人の思いでありましょう。政池先生も宗次郎追憶の文章の中でこう言っておられます。「多折子さんは、やがて幸にも鈴木茂夫氏を婿養子として迎えるの幸福を与えられ、幸福で明るいので有名なクリスチャン・ホームを営んでおられる」。

大家長たる宗次郎先生は初代信徒にふさわしく純真にして熱血、政池先生がいみじくも言われたペテロのような方であり、これを継がれた茂夫先生は教養豊かな学者であり、詩歌をよくし、奥様の伴奏で自らドイツ・リートを歌われるクリスチャン・ジュエントルマンであられました。そして、激しい迫害の中で宗次郎支えたのがスエ夫人であり、彼女は「主よ、みもとに」を歌いつつ召されたのでした。その後、多折さまの希望もあって再婚されたという仁志夫人またよく宗次郎を助け、その多折様を立派に育てられたのであります。

私とは私の妻の存じあげる多折様は、いつも変わらぬお美しく、内なる平和をそのままに映して慎ましやかで、穏やかに、そして優しくいらつしました。しかし多折様は半面内に強さを秘めた、しつかりした方であつたように拝察いたします。女子学院ご卒業の折には、卒業生を代表して謝辭を述べ、ピアノを独奏されたといひます。幼くして、父上の信仰上の受難や、姉君愛子と母上とのうちつづく永別という苦難に遭われたことが、多折様を内に強めたのでありましようか。一九歳の時に内村先生から洗礼をお受けになつてから、八十五歳で召されるまで、主イエスの忠実な僕として生きぬき、茂夫先生とともに五人の令嬢を信仰をもつて育て、その名の通り多くの祈りをもつて斉藤家を信仰の家として守り、これをクリスチャン・ホームとして神に献げられたのであります。

きょう私どもはここに、この多岐様の遺骨を納めました。「甦りの朝を望みて」という宗次郎の銘が刻まれたこの墓所には、すでに宗次郎の長女愛子、スエ夫人、宗次郎、仁志夫人、茂夫、そして宗次郎の孫女であり茂夫と多折の次女頌々子の遺骨が納められています。多折様はきょうこの家族に加われました。何か多折様は、時間的、歴史的に、そして恐らく空間的にも、ちょうどクリスチャン・ホーム斉藤家の真中に位置していらつしやるような気がいたします。

七人の方が向う側に行かれて、こちら側はいささか寂しくなつたような気がいたします。しかし決してそうではありません。内村鑑三はその娘ルツ子を失くした折(宗次郎はその葬儀に出席して弔辭を讀んでいます)、こう歌っております。

われらは四人である(ルツ子逝きて後に)

われらは四人であつた

そして今なお四人である

戸籍帳簿に一人の名は消え

四角の食台の一方はむなしく
四部合奏の一部は欠けても
賛美の調子は乱されしといえども
しかしわれらは今もお四人である

われらは今もお四人である
地の帳簿に一人の名は消えて
天の記録に一人の名はふえた
三度の食時に空席はできたが
残る三人はより親しく成った
彼女は今はわれらの内にいる
一人は三人を縛る愛のきずなとなった

しかし、われらはいつまでもかくあるのではない
われらは後にまた前のごとく四人に成るのである

神のラッパの鳴り響く時
眠れる者がみな起き上がる時
主が再びこの地に臨(きた)りたもう時

新しきエルサレムが天より降(くだ)る時

われらは再び四人に成るのである
地上が寂しくなった分、かしこはにぎやかになったのであります。私どもは、ただしばらくの間、生き、働く場所を違えるようになったのみで、みな同じ神の国、神の支配のもとにあるのであります。

年譜によりますと、宗次郎が初めて内村の精神に触れたのが一八九五年、清水スエと結婚したのが同九八年でありますから、信仰の家庭なる斉藤家は、ここにほぼ百年の名誉ある歴史を持つこととなります。それはまさしく「宗次郎以来、花巻、成宗と恩寵の下に送って」こられた一世紀であります。

過日きよの集りの打ち合わせのために成宗に参上しました。その折成宗の財産がこの際整理されることになったと伺いました。その相談をなされた方々がお育ちになった家、茂夫・多折ご夫妻のスウィート・ホーム、宗次郎が『二荆自叙伝』を執筆された部屋、古くは内村が宗次郎の母を愛でたという庭園が失われることは、はなはだ惜しまれるところであり、これは確かに斉藤家にとって「ひとつの大きな区切り」であると思わざるをえません。

しかし、私ども、斉藤家の皆様はもちろん、佐藤家に保わって共に内村の信仰の遺産に生きる者はみな、これを単なる回顧の区切りとするのではなく、新しい前進の、これからの百年への区切りとするべく祈り、かつ努めるものでなくてはなるまいと考えます。

これまで斉藤家は、あるいは宗次郎に、あるいは成宗に集中し、凝縮し、固着しておりました。恩寵はそのように働いて、一つの美しいクリスチャン・ホームを生み出しました。しかしこれからは、同じ恩寵は別様に働いて、その精神は斉藤家直伝でありながら、その在り方においては多様、多彩で、豊かなニュー・クリス

チャン・ホームを生んでいくことでありましょう。ひとりに集中するよりは各人各個がその賜物を互いに頒ち合い、一所に固着するよりは広い神のぶどう園のいずこへも出て行って、そこに一層堅固で、活力ある信仰の共同体を形成していかれるだろうと信じます。見える成宗の家は無くなっても、見えない天のホームを望み見て、宗次郎先生の信仰と使命に生きていかれんことを希望いたします。

現に斉藤家の皆様は、すでにそのように生きておられ、その生活と信仰がここに「ひとつの大きな区切り」をつけることを決断されたのだと諒承しております。

「きよき岸辺」をはさんで、彼の岸辺の七人の斉藤家のご家族と、この地上にこれからの百年を生きていかれる数多くの斉藤家のご家族とをつなぐものは何でありましょうか。宗次郎先生はその召される前日、こう言われたそうです。「世の中の人は涙をもつて人の死を悲しむが、クリスチャンはそんなことはない。私は神様の御許にゆくから、あとからみんなソロンロついでくるがよい」。これを一言で申しますならば、「神の国の福音」の信仰でありましょう。

神の国の福音とは、私どもみなイエス・キリストの十字架の贖罪によつて罪を赦され、潔められて、聖なる神の前に立つことができるという神の愛による救いの消息であります。この喜ばしい音信（おとずれ）を信じ生きてるとき、私どもは死から生命へ移されます。この神の賜う生命こそ、彼の岸辺にある者と、この岸辺にある者をつなぐ確かな愛のきずなであり、これにしっかりとつながれて、私どもはどちらの岸にあるかと、神の一つ家族であり、クリストのクリスチャン・ホームなのであります。

それでありますから、なおしばらく、この見える世界に生きる私どもは、次のパウロの勧めに従つて生きるものでありたいと願います。「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは

一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」。

斉藤家の皆様方の上に、天来の祝福と慰めの一層に豊かならんことを祈つて、式辞を終わります。

（一九九一年九月二十九日 東京小平霊園、斉藤家墓前にて）